

新型コロナウイルス禍で 改めて知る

―身近な場所の 良さ・大切さ―

建築家
東京大学 名誉教授
香山 壽夫



Hisao Kohyama

地域の再発見

疫病の世界的流行による外出制限がこう長く続くと、誰しももううんざりだ。孫と遊ぶ、友人と会う、なじみの店に食事に行く、といった当たり前がいかに私達の日常にとって、かけがえないものであったかに気付かされる。外国の友人に会う約束も、キャンセル続きで、今や予定もなくなつた。老後の楽しみの一つが消えて、さみしいことだ。

しかし悪いことだけでもない。良いこともある。テレワークで通勤の苦勞が減り、自宅で過ごす時間が増えた。外から煩わされることなく、自分のリズムで仕事ができる。そして夕方、坂道の向こうに日の沈むのを眺めて、住んでいる所の良さを再発見したりできる。庭の手入れは人に頼まず、自分でやる。冬の暖炉の薪も、買わずに自分で割る。自ずと、エコな生活になつていくのである。

また、巨大なカーブを引きずった国際観光ツアーの大群が、姿を消してくれたことも、嬉しいことだ。

町に、静けさと落ち着きが戻つてきた。このような巨大集団による観光旅行のあり方は、地域を破壊し、結局観光そのものを無意味にする。そもそも、石油を浪費した安価な運賃で、団体客を世界中にばらまく航空業そのものに、間違いがあるのだ。

「巨大都市に 未来はない」

一九七〇年代、イギリスの経済学者E・F・シューマツハーは、こう断言した。彼は巨大技術・現代文明を鋭く批判して、世界の注目を集めた『スモール・イズ・ビューティフル―人間中心の経済学』という著作の中で、こう書いた。「現代の世界の各地に出現しているメガロポリス（巨大都市）は、人類の都市建設の長い歴史の、たかだかこの百年に起こつた『異常な事態であつて、そこに未来はない』。エネルギーの大量消費の上に成立している巨大都市は、石油資源の枯渇、地球環境の破壊と共に消滅せざるを得ない

からだ」。この本が書かれた時の日本は、まさに経済大成長に突入せんとする時、丹下健三の「新東京計画」や、菊竹清訓の「海上都市案」といった巨大都市の提案が、人々の耳目を集めていた時だった。シューマツハーの言から半世紀、その状況は、ますます現実になつていく。

その上に、今、更に新しい困難が襲いかかつてきている。「パンデミック」の問題だ。実はこの問題は、新しい問題ではない。W・H・マクニールの『疫病と世界史』は、四〇万年前、私達人類の先祖が、アフリカ大陸中央部の「楽園」から離れ、旅立つて以来のウイルスとの戦いは、終わりのない、永遠の闘争であったことを教えてくれる。人間が抗体を作り、ワクチンを開発して対抗しても、ウイルスは必ず新しい能力を持つ変異体で新たな攻撃を仕掛けてくる。この戦いは、結着のない、永久戦争なのだと言われている。

確かに、この戦いに終わりはないのかもしれない。しかし、そうだとすると、戦死者の数を少しでも減ら

し、停戦期間をしばしでも長くする手立てはある。それは、居住地域の単位を、適度な大きさとまとめ、その間の人流や物流を、最少にするのだ。すなわち、巨大都市建設はもう終わりにし、もう一度人の住むまとまりを作り直すことだ。

「建築とは、人を包み、守る空間を作ることである」とは私達が、建築学科に入って最初に教わることではなかつたか。そして「空間を造る」とは、それを囲う境界を適切にかたちで作ることだつたはずだ。とすれば疫病から人類を救う仕事の基本は、私達、建設者の手に委ねられていることでもあるのだ。

「地域」への回帰

江戸時代の日本は、江戸を単一の中心とした国ではなく、「独自性のある地域の集合体」であり、そこに近代日本の躍進の基盤があつた、と日本文化研究者のE・O・ライシャワーは、その著書『日本人』の中で述べている。確かに、私自身の

記憶をたどつても、一九六〇年代までは、日本各地に特色ある固有の文化、町並みが残り、そこに喜びと誇りある生活が残つていた。しかし、高度経済成長の時代以降、東京の巨大化と平行して地域の活力は衰え、その特色は急速に消えていった。ライシャワーの言う日本の活力の基盤は消失してしまつたのか。では、もはや日本の未来に希望は持てないのか。

いや、希望につながる兆しはある。設計者として、地方の公共施設を手掛ける際に、いつも求められることは、「この地にふさわしい建築を作ってください」「どこの国ものかわからない、奇抜なもののは止めてください」ということだ。自分の地域の伝統に誇りを持ち、大切にしたい気持ちは消えてしまつたわけではないのである。

困難を承知の上で、新しい農業に挑戦している若者に出会うこともある。私の身近にも、故郷の旭川、あるいは金沢に帰つて、地域の特色を掘り起こし、力強く仕事を積み上

げつつある者もいれば、東京育ちでありながら、能登の風土を新たに捉え直し、夫婦揃つて独自の仕事を展開している者もある。東京にあつても地域・伝統を強化する仕事はできる。こういう仕事の内にこそ、未来はあると、私は感じている。

「グローバルイゼーション」という言葉が理想であるかのように叫ばれて久しい。確かに、「地球的」にしか解決できない問題は、存在するだろう。しかし、建築・建設の問題は、常にそれぞれの風土・伝統の上に立つものであるが故に本質的に「地域的」なものである。そのことを忘れて、伝統を拒否して革新的であること、風土を否定して国際的であることを理想に掲げるのはもう終わりにしたい。

これからは、「グローバル」な建築というような、宙に舞い上がった仕事は終わりにしよう。そして大地を踏みしめて立つ「リージョナル」な建築を造るといふ、建設者の本質に立ち返つた仕事をしたい。私は、今そう考えている。